今週の倫理

2023．3．4〜3．10

3月のテーマ ｜ 地球倫理

1323号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載いたします。

星空への畏敬

丸山竹秋

夏の夜空を仰いでいて、たまたま天の川が見えたりすると、すてきだなと思う。

この天の川よりはるか彼方の、宇宙の果てともいうべきところに、新たな準星が活動していることが発見されたのは、昭和五十四年（一九七九）の春である。

準星とは、銀河（天の川）系の外のガス雲状のようなもので、ものすごいエネルギーを放射しており、その正体はまだよく分からないが、電波星雲ともよばれている。宇宙の果てともいうべき遠方にある不思議な天体のことだ。

宇宙には、この巨大な銀河系のほか、渦巻型や楕円型、レンズ型その他不規則な形をした星雲がいくつもあって、五百万光年から一千万光年までの距離を推定できる。

この大宇宙とは、想像することもできない広大さなのだ。それほど広大無辺の中にいる、この人間そして自分……そこにいったい何を思ったらよいのであろうか。

哲学者のカントは、『実践理性批判』（理想社版『カント全集』第七巻三六八頁）という本の結論のはじめに、

二つの事物があって、それについてわれわれの考察が一層しばしば、一層継続的に没頭してゆけばゆくほど、いよいよ新たな、そうして増大してゆく感歎と畏敬の念をもって心を満たすのである。すなわち、わが頭上なる星繁き天空とわが内なる道徳的法則とである。

と書いた。これはカントの墓碑銘ともなって今や世界的に有名な言葉だが、カントのように星空を仰いで、感歎と畏敬の念をいよいよ深くするのは尊いことだ。カントの考えた道徳とは、せまい意味のものにすぎなかったが、それでもその道徳を畏敬するまごころは深く純なものであった。彼は星空を仰いで、道徳倫理の偉大さに深く心を打たれていたのである。

あの天の川から、どれほどの恵みを受けているかは、今後天体物理学その他が次第に明らかにしてくれるだろう。しかし現在でも宇宙線などが地球上にさまざまな影響を与えることは少し分かっている。また北斗七星や南十字星などによって方向を知ることもできる。しかし何よりもすばらしいのは、美しさであろう。

地上の生活に驕りを感じるときは、つつしんで空を仰ぐとよい。そして、あの彼方の、さらに彼方の、またその彼方には不可思議な準星というものがあって、地球に感ぜられるほどの巨大なエネルギーを放射しつつあるのだなあと思いめぐらすとき、その人の驕りは、さらに薄くなっていく。

いろいろな悩みも、大宇宙の中ではケシ粒ほどの存在でしかない。こうして汚れた心を何度も洗い直しつつ、地球をより美しく、毎日をより楽しく働いていこう。

（『あなたは生命の元を見つけたか』より）

え・城谷俊也